

繰り返される無理心中事件の報道に接して

新聞記事で「妻子殺した被告に裁判長：長男が生まれたことには必ず意味がある、あなたが生き残ったことにも意味がある。」を目にした。

記事の概略は、昨年の夏に、27才の重度の知的障害の長男の将来を悲観した妻から「3人で逝こう」と請われて妻子を刺し殺し、自らも自殺を図ったが死にきれなかった父親に裁判長が論じたという内容。

つい先月末にも、母親が37才の障害のある双子の介護の疲れから無理心中を図ったが、一人は死亡、一人は重傷、母親は死にきれず逮捕された報道もあった。

思い詰めてこうした悲劇に行き着かないように、障害児の親たちの会合では、まず“My child is not only mine, but also a person.”と話し、“not only mine”だからこそ、周りに助けを求めていいと語りかけている。

「福祉、福祉」と叫ばれ、障害者自立支援法関係が毎日のように報道されている昨今だけに、この事件報道の親たちもそうした知識・情報に接していたであろうに、こうした無理心中がどうして繰り返されるのだろうか、つい考え込んでしまう。

思うに、我々も知識、情報を多く得たとしても、それらを自らの生きよう（様）にどう活かすかという自分で考える習慣を身につけないと、折角の知識、情報も意味をなさないように思う。

自分で考える習慣を身につけるには、自らが考えて行動する体験の過程でこそ身に着くだけに、そのためには知識、情報をどう自らに活かすかのヒントを授けてくれる周りの助けも必要な気がする。

もちろん、その前提として、まず我々自身が自らが革生（旧態を改革して新しい方向に進むこと）しよう、現状を改善しようとし、そのために、周りの助けを求める気持ちがあるかどうか、言い換えれば周りのアドバイスに耳を傾ける“素直さ”が必要条件となるような気がする。

最後に、親子を無理心中に追い込む社会の理解・支援の不十分さも検証し、支援策を再構築しなくてはならないことは言うまでもない。

これら側面については、既に当 HP で「『障害ある長女を殺害 容疑の母逮捕』の報道に接して（HP「雑学 BN」、2006.05.07.）」や、「事件後の検証作業より、日頃からの連携システムを！（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（IV）、2007.12.11.）」の記事等で何度か触れているので、参照いただきたい。